

メタ統合を用いた看護学研究の現状

——分析方法に焦点を当てて——

山下 暢子, 三浦 弘恵, 松田 安弘

群馬県立県民健康科学大学

目的：「メタ統合」を用いた研究の分析方法を概観してその現状を解明し、分析方法の特徴や今後の課題を考察する。

方法：CINAHL を用い、「metasynthesis」「meta-synthesis」をキーワードとし、海外文献を検索した。また、医学中央雑誌を用い、「メタ統合」をキーワードとし、わが国の文献を検索した。次に、「メタ統合」を用いた研究を対象論文として抽出した。最後に、「メタ統合」を用いた研究の分析方法を概観し、その現状を解明した。

結果：対象論文として40件を抽出した。「メタ統合」を用いた研究の6種類の分析方法が存在した。それは、【1. 現象を表す包括的な概念をうみ出す方法】【2. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法】などであった。

結論：6種類の分析方法の特徴が明らかになった。本研究の結果は、それぞれの研究目的に適した分析方法を選択するための資料となる。また、各分析方法の発展に向けては、研究者が、各自の具体的方法を十分に検討し、論述していく必要がある。

キーワード：メタ統合, 質的研究, 系統的文献検索

I. はじめに

質的研究とは、人間および人間とその環境との相互行為の特性を理解するための系統的研究の諸様式¹⁾である。近年、看護学の質的研究は、海外のみならず国内においても蓄積されている²⁾³⁾。これは、看護に関する人間および人間とその環境との相互行為がどのような特性を持つのかを表す知識が徐々に増加している状況を表す。

また1980年代頃より、複数の質的研究の成果を統合し、新たな発見を導く「メタ統合」という研究デザインが用いられるようになった。「メタ統合」とは、テーマに共通性のある一連の質的研究の成果を比較・統合し、そのテーマに関連する本質的な要素や概念、理論的な記述の発展と大理論や中範囲理論などの新たな発展を導くための研究

デザイン^{4)~8)}である。これは、「メタ統合」が、テーマとする看護現象の本質的な要素や概念などの新たな発見をもたらすことを示す。また、「メタ統合」により得られた結果が、看護職者の看護現象の本質に対する理解の深化に役立つことを示す。

しかし、この「メタ統合」の分析方法は今だ確立しておらず、研究者個々が目的に応じてその方法を試行錯誤している⁹⁾。

今後、看護現象の本質理解を促す、精度の高い結果を産出していくためには、まず、「メタ統合」を用いた研究の分析方法の現状を明らかにし、その特徴や研究への活用可能性を明確にする必要がある。

そこで本研究は、「メタ統合」を用いた研究の分析方法を概観してその現状を解明し、分析方法の特徴や今後の課題を考察することを目指す。

II. 研究目的

「メタ統合」を用いた研究の分析方法を概観してその現状を解明し、分析方法の特徴や今後の課題を考察する。

III. 用語の概念規定

1. メタ統合 (meta-synthesis)

「メタ統合」とは、テーマに共通性のある一連の質的研究の成果を比較・統合し、そのテーマに関連する本質的な要素や概念、理論的な記述の発展と大理論や中範囲理論などの新たな発展を導くための研究デザイン¹⁰⁻¹⁴⁾である。

IV. 研究方法

1. 対象文献の選択

キーワードを「metasynthesis」「meta-synthesis」に設定し、CINAHLを用いて1982年から2006年までに発表された海外の文献を検索した。同時に、キーワードを「メタ統合」に設定し、医学中央雑誌を用いて1983年から2006年までに発表されたわが国の文献を検索した。

次に、検索できた文献のタイトル・要旨を概観し、「メタ統合」を用いた研究を対象文献として選

定した。

なお本研究は、「メタ統合」を用いた研究の分析方法を概観し、分析方法の現状を解明することを目ざす。各文献の用いた分析方法の詳細は、原著論文に論述されている可能性が高い。そこで本研究は、原著論文を対象文献として選定した。

2. 分析方法

対象文献を精読し、筆者らが開発した分析フォームを用いて、その概要を整理した。この分析フォームは、「研究目的」「発表年」「研究者の所属機関所在国」「一次論文数」「分析方法」からなる。

まず、「発表年」「研究者の所属機関所在国」「一次論文数」に着目し、それぞれの記述統計値を算出した。

次に、各対象文献が用いた「分析方法」に着目し、方法の類似性に基づき分類し、集合体を形成した。また、形成された「分析方法」の集合体に共通する方法を明確化し、それに命名した。

3. 信用性の確保

共同研究者間の検討により、分類・命名の信用性を確保した。

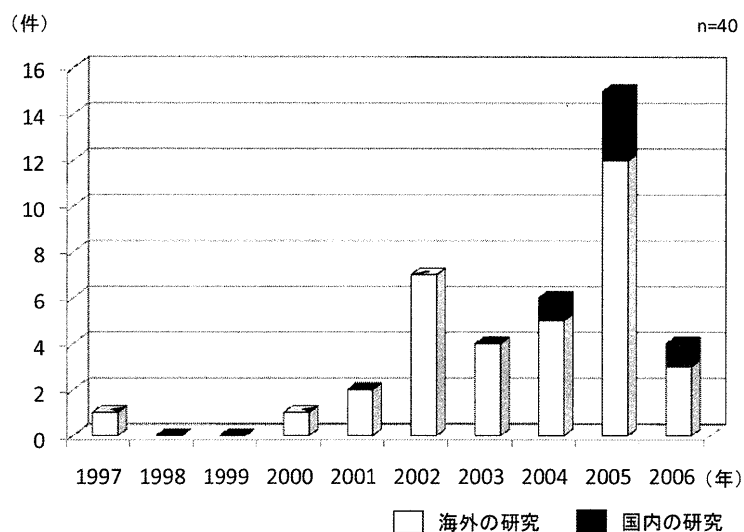


図1 海外と国内の年次別研究数

V. 結 果

1. 対象文献数

対象文献として、「メタ統合」を用いた海外の文献35件、国内の文献5件、合計40件を選定した。

2. 対象文献の特徴

1) 年次別文献数 (図1)

対象文献の年次別文献数は、1997年1件、2000年1件、2001年2件、2002年7件、2003年4件、2004年6件、2005年15件、2006年4件であった。また、このうち、わが国の文献は、2004年1件、2005年3件、2006年1件であった。

2) 研究者の所属機関所在国 (表1)

対象文献の研究者の所属機関所在国は、アメリカ25件、日本5件、フィンランド5件、カナダ3

件、イギリス2件であった。

3) 対象文献が統合対象とした一次論文数

対象文献が統合対象とした一次論文数は、2件から292件であり、平均30.6件であった。

4) 対象文献が用いた分析方法 (表2)

対象文献が用いた分析方法は、方法の類似性に基づき6種類に分類できた。すなわち、「メタ統合」を用いた研究の6種類の分析方法が存在した。

表1 研究者の所属先所在国 n=40

国 名	対象文献数
ア メ リ カ	25件
日 本	5件
フィンランド	5件
カ ナ ダ	3件
イ ギ リ ス	2件

表2 「メタ統合」を用いた研究の分析方法

n=40

文献番号	研究目的	発表年	研究者の所属機関所在国	一次論文数	分析方法	分析方法の種類
1	『HIV陽性と診断されたゲイの男性のセルフケアに関する研究』『長期間AIDSとともに生活する人のセルフケアに関する研究』などの一次論文の成果を統合し、HIVとともに生きる人の経験への理解を深める。	2000	米国	21	・一次論文21件の成果をコード化し、コードを比較・分類してHIVとともに生きる人の経験を表す6つの包括的なメタファーを産出する。(持続比較分析)	1-1. 一次論文の成果を比較し、現象を表す包括的な概念をうみ出す方法 【1. 現象を表す包括的な概念をうみ出す方法】(20件, 50.0%)
2	『双子と母親の相互行為に関する研究』『三つ子の誕生に対する母親の反応に関する研究』などの一次論文の成果を統合することにより、多胎児の母親になる経験を明らかにする。	2002	米国	6	・一次論文6件の成果を比較・統合し、多胎児の母親の出産後1年間の経験を表すテーマを産出する。(Noblit & Hareの7段階)	
3	『障害を持つ幼児の母親になる経験に関する研究』『アダルトチルドレンに関する研究』などの一次論文の成果を統合することにより、障害を持つ子どもの母親になる経験を明らかにする。	2002	米国	12	・一次論文12件の成果を比較・統合し、障害を持つ子どもの母親になっていく経験を表す過程とそこに含まれるテーマを産出する。(Noblit & Hareの7段階)	
4	『助産師から支援を受けた女性の経験に関する研究』『女性と助産師の相互行為に関する研究』などの一次論文の成果を統合することにより、一次論文に共通するテーマやメタファーを明らかにする。	2003	米国	6	・一次論文6件の成果を統合し、助産師の実践に関する4つの包括的なテーマを産出する。(Noblit & Hareの7段階)	
5	『子どものいるホームレスの家族の経験に関する研究』『収容施設におけるホームレスの母親の育児に関する研究』などの一次論文の成果を統合することにより、収容施設にて子どもと暮らすホームレスの女性に対する理解を深める。	2002	米国	18	・一次論文18件の成果を相互に比較し、収容施設にて育児を行うホームレスの母親であることを表す6つの相補的な言い換えを産出する。(Noblit & Hareの7段階)	
6	『母乳により育児をしている10代の母親の経験に関する研究』『10代の女性のうち、母親である女性と母親でない女性の異なりに関する研究』などの一次論文の成果を統合することにより、10代の母親の実態をより明確に記述する。	2003	米国	18	・一次論文18件の成果を統合し、10代の母親の経験を表す5つのメタファーを産出する。(Noblit & Hareの7段階)	
7	『機械換気中、会話できないことに対するクライアントの知覚に関する研究』『機械換気中のクライアントの精神的ストレスと対処、看護職者の支援に関する研究』などの一次論文の成果を統合し、クライアントのコミュニケーションに関する経験を表すテーマを産出する。	2004	米国	12	・一次論文12件の成果を統合し、クライアントのコミュニケーションに関する経験を表すテーマを産出する。(Noblit & Hareの7段階)	

8	『民族の異なる人々に看護を提供する保健師の自信に関する研究』『看護師・看護学生の知覚する自分とは文化的背景の異なるクライアントに対する看護実践に関する研究』などの一次論文の成果を統合し、自分とは文化的背景の異なるクライアントへ看護を提供する看護師の経験を表現する。	2004	米国	13	・一次論文13件の成果を統合し、自分とは文化的背景の異なるクライアントへ看護を提供する看護師の経験に関する研究成果を比較し、6つの相補的な言い換えを産出する。(Noblit & Hare の7段階)		
9	『看護学実習中の学生・クライアント・教員三者間相互行為場面における教授活動に関する研究』『看護学実習中の学生・教員二者間相互行為場面における教授活動に関する研究』などの一次論文の成果を統合し、看護学実習の目標達成に必要な不可欠な教授活動を明らかにする。	2005	日本	3	・一次論文の成果を統合し、看護学実習の目標達成に必要な不可欠な13の教授活動を概念化する。		
10	『未熟児の母親の不安・落胆・反感に関する研究』『未熟児の両親の感情と認知に関する研究』などの一次論文の成果を統合し、より質の高い看護を提供するための枠組みを提示する。	2005	米国	10	・一次論文10件の成果を統合し、未熟児の親になっていく過程に関する5つの相補的な言い換えを産出する。(Noblit & Hare の7段階)		
11	『貧困に直面しながらの子育てに関する研究』『低所得に対する家族の方略に関する研究』などの一次論文の成果を統合し、貧困のため、公式・非公式な支援を受けながら子育てをするという経験を明らかにする。	2005	英国	12	・一次論文12件の成果を統合し、低所得の家族に対する公式・非公式な支援を記述する。(Noblit & Hare の7段階)		
12	『妊娠した10代の母親の人生への影響と環境に関する研究』『10代の女性による社会福祉制度の活用に関する研究』などの一次論文の成果を統合し、ホームレスである10代の母親の経験を明らかにする。	2006	米国	6	・一次論文6件の成果を統合し、10代の母親の経験を表す6つ相補的な言い換えを産出する。(Noblit & Hare の7段階)		
13	『ホスピス看護師の専門性に関する研究』『ホスピス看護師の悲嘆の解消に関する研究』などの一次論文の成果を統合し、米国のホスピスに勤務する看護師の性質や特徴、挑戦を明らかにする。	2006	米国	9	・一次論文9件の成果を統合し、ホスピス看護師の性質・特徴・挑戦を表す6つのメタファーを産出する。(Noblit & Hare の7段階)		
14	『二分脊椎の子どもの持つ母親の経験に関する研究』『糖尿病の子どもの持つ母親の知覚に関する研究』などの一次論文の成果を統合し、慢性疾患を持つ子どもの世話をするという現象を明らかにする。	2006	米国	11	・一次論文11件の成果を統合し、慢性疾患を持つ子どもの世話をするという現象を表す7つのテーマを産出する。(Noblit & Hare の7段階)		
15	『HIVの女性感染者の薬物中毒に関する研究』『HIVの女性感染者の不名誉の原因に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、HIVの女性感染者の不名誉を明らかにする。	2004	米国	93	・一次論文93件からHIVの女性感染者の不名誉に関する記述を抽出し、それを帰納的に分析し、不名誉を表す51カテゴリを形成する。・カテゴリのエフェクトサイズを算出する。(メタサマリーの方法)	1-2. 一次論文から記述を抽出し、現象を表す包括的な概念をうみ出す方法	
16	『重要他者の視点からのHIV/AIDSとともに生きる人と重要他者の希望の移り変わりに関する研究』『HIV/AIDSとともに生きることの希望の移り変わりに関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、HIVとともに生きる人の重要他者の希望の移り変わりを明らかにする。	2005	フィンランド	5	・一次論文5件から希望の移り変わりに関する記述を抽出し、それを帰納的に分析してHIV/AIDSとともに生きる人の重要他者の希望の移り変わりモデルを構築する。		
17	『新生児に対する殺人に関する研究』『殺人を犯す傾向のある親に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、親が子どもを殺す動機を分類するシステムを開発する。	2005	米国	7	・一次論文7件から親が子どもを殺す動機に関する記述、子どもを殺す母親に関する記述を抽出し、それを帰納的に分析して、子どもを殺す動機に関する6カテゴリ、子どもを殺す母親に関する8カテゴリを形成する。		
18	『クライアント中心の看護記録に関する研究』『看護記録の評価に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、個別的なケアや看護ケアに包含される倫理原則がどのように記載されているのかを明らかにする。	2005	フィンランド	14	・一次論文14件から看護記録に関するフレーズやテーマを抽出し、それを帰納的に分析して看護記録に影響する3側面を明らかにする。		
19	『生後間もない時期の未熟児の死を取り巻く経験に関する研究』『胎児の出生前診断陽性に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、胎児に障害があると診断を受けた両親に関して明らかにする。	2005	米国	17	・一次論文17件から胎児に障害があると診断を受けた両親であることに関する記述を抽出し、帰納的に分析し、両親に関する39カテゴリを形成する。・カテゴリのエフェクトサイズを算出する。(メタサマリーの方法)		
20	『ホスピスの職員とクライアントの“良い死”に対する知覚に関する研究』『クライアントと援助提供者の緩和ケアへの理解に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、クライアント・家族の視点からの終末期ケアの質を明らかにする。	2005	カナダ	7	・一次論文7件から終末期ケアの質に関するテーマ、メタファー、概念を抽出し、それを帰納的に分析して終末期ケアの質に関する8つのテーマを産出する。		
21	『女性の視点から母親の視点への移行に関する研究』『初産婦のニードに関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、母親への移行を明らかにする。	2003	米国	9	・一次論文9件から母親への移行に関する記述を抽出し、それを帰納的に分析して母親への移行モデルを構築する。(Noblit & Hare の7段階)	2-1. 一次論文の成果・記述を統合し、現象を表す包括的な概念をうみ出し、概念を時間の流れに沿って並べる方法	【2. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法】 (12件, 30.0%)

22	『援助提供者が記述した HIV/AIDS のクライアントの希望に関する研究』『保健医療専門職者の視点から見た HIV/AIDS のクライアントと重要他者の希望の移り変わりに関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、HIV とともに生きる人の希望の移り変わりを明らかにする。	2005	フィンランド	5	・一次論文 5 件から希望の移り変わりに関する記述を抽出し、それを帰納的に分析して HIV/AIDS とともに生きる人の希望の移り変わりモデルを構築する。	
23	『地方に居住する女性の HIV/AIDS の心理社会的・性心理的影響に関する研究』『HIV 感染を告げられた女性の語りに関する研究』などの過去 10 年間の一次論文の成果を統合し、HIV 感染女性の薬物中毒の過程を明らかにする。	2004	米国	74	・一次論文 74 件から薬物中毒に関する記述を抽出し、それを帰納的に分析して HIV 感染女性の薬物中毒の過程を表すモデルを構築する。	
24	『誕生後 2 ヶ月間の乳児との関係形成する父親に関する研究』『配偶者が母乳で育児している父親の経験に関する研究』などの一次論文の成果を統合し、子どもの父親になる経験を明らかにする。	2005	米国	7	・一次論文 6 件の成果を統合し、子どもの父親になる役割の発展を表すモデルを構築する。	
25	『女性の精神的健康に関する研究』『乳がんのクライアントの精神力に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、女性の精神力を表す中範囲理論を開発する。	2002	米国	5	・一次論文 5 件から女性の精神力に関する記述を抽出し、それを帰納的に分析して精神力の発達のパターンを構築する。	2-2. 一次論文の成果・記述を統合し、現象的な概念をうみ出し、概念間の関連を図示する方法
26	『出産後の鬱状態にある母親の新生児との相互行為に関する研究』『母親同士の社会的接触の重要性に関する研究』などの一次論文の成果を統合することにより、出産後の鬱に関する解釈を拡大し、より広範囲の語りを構築する。	2002	米国	18	・一次論文 18 件の成果を比較し、出産後の鬱に関する 4 つの視点を明らかにする。 (Noblit&Hare の 7 段階)	
27	『男子看護学生の経験を概念化した研究』と『男性看護師の経験を概念化した研究』の成果を統合することにより、看護における少数者の経験を明らかにする。	2004	日本	2	・一次論文 2 件の成果を統合し、看護における性の異なる少数者の経験を表す 6 つの概念を産出する。	
28	『家族のケア力を高める看護に関する研究』『不妊女性に対する看護のジレンマの内容と看護上の意思決定までの過程に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合のための理論的枠組みを構築する。	2005	日本	13	・一次論文 13 件から対人援助関係に関する記述を抽出し、帰納的に分析して日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合のための理論的枠組みを構築する。	
29	『乳がんのクライアントである台湾人女性の生きられた経験に関する研究』『乳がんのクライアントの自己尊重と安寧の要因としての自己変換に関する研究』などの一次論文から抽出した成果を統合し、クライアントの視点から乳がんのクライアントの経験を明らかにする。	2003	フィンランド	14	・一次論文 14 件から乳がんのクライアントの苦痛に関する記述を抽出し、それを帰納的に分析して乳がんのクライアントの健康と苦痛を理解するためのモデルを明らかにする。	
30	『教員と学生間のケアリングに関する研究』『学生間のケアリングに関する研究』などの一次論文の成果を統合することにより、看護学教育におけるケアリングを明らかにする。	2001	米国	14	・一次論文 14 件の成果を比較・統合し、看護学教育におけるケアリングに関する 5 つのカテゴリを産出する。 (Noblit&Hare の 7 段階)	
31	『クライアントの視点からのケアの経験に関する研究』『老年期のクライアントがケアリングと知覚する看護師の行動に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、クライアントの視点から見た看護師のケアリングを明らかにする。	1997	米国	16	・一次論文 16 件からクライアントの視点からのケアリングに関する記述を抽出し、それを帰納的に分析してケアリングモデルを構築する。	
32	『HIV/AIDS のクライアントの希望に関する研究』『HIV/AIDS とともに生きる人の希望・諦め・絶望に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、HIV とともに生きる人の諦めと絶望の移り変わりを明らかにする。	2005	フィンランド	5	・一次論文 5 件から諦めと絶望に記述を抽出し、それを帰納的に分析して HIV/AIDS とともに生きる人の諦めと絶望の移り変わりを論述する。	
33	『地域生活集団を対象としたケース管理の方法に関する研究』『地域ケアの現状から見た保健師の役割に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、行政保健師の看護実践知を明らかにする。	2005	日本	3	・一次論文 3 件から看護援助の要素を抽出し、それを帰納的に分析し、統合知見を導く、さらに統合知見の関連を解明し、命名する。	【3. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連にも命名する方法】 (1 件, 2.5%)
34	『看護学実習中の学生の行動を概念化した研究』『看護学実習中の学生の経験を概念化した研究』を一次論文とし、一次論文の成果と成果の間の関連を明らかにする。	2006	日本	2	・一次論文 2 件それぞれの成果を他の成果を用いて解釈・比較し、研究成果間の関連を解明し、命名する。	【4. 一次論文の成果間の関連に命名する方法】 (1 件, 2.5%)
35	『癌のクライアントに対するケアリングにおけるタッチの活用と意味に関する研究』『看護師とクライアントの出会いにおける文化的差異に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、看護のケアリングに対する人間の反応を明らかにする。	2002	米国	42	・一次論文 42 件から看護のケアリングに関する記述を抽出し、先行研究の結果である「人間の 7 つの反応モデル」に分類する。またその分類の中で統合する。	【5. 一次論文から抽出した記述を一定の基準に基づき分類した後、その分類の中で包括的な概念をうみ出す方法】 (4 件, 10.0%)
36	『医師と協働する専門看護師の生きられた経験に関する研究』『高度な看護実践に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、スペシャリストの役割発展・効果的な実践および急性期病院における看護の役割の発展の促進要因・阻害要因を明らかにする。	2005	英国	14	・一次論文 14 件からスペシャリストの役割発展・効果的な実践および急性期病院における看護の役割の発展に関する記述を抽出し、促進要因・阻害要因に分類する。また、分類した促進要因・阻害要因それぞれを統合する。	
37	『受診が遅れる理由の男女間の差異に関する研究』『病院までの到着時間を評価した研究』などの一次論文から抽出した記述を統合し、急性心筋梗塞の徴候・症状を経験した女性の受診が遅れた理由を明らかにする。	2004	米国	48	・一次論文 48 件から受診の遅れに関する記述を抽出し、それを「臨床要因」「本人特性」「心理社会的特性」に分類し、分類した中で統合する。	

38	『離婚後の女性が受けている社会的支援に関する研究』『介護者に対する社会的支援に関する研究』などの一次論文から抽出した記述を分類・統合し、社会的支援という用語を詳細に表す。	2005	米国	47	・一次論文47件から抽出した社会的支援に関する記述を抽出し、概念分析に用いる「前件」と「推断」に配置する。 ・配置後、「前件」「推断」それぞれの中で統合する。	
39	慢性疾患に関する多様な一次論文を分析し、慢性疾患に対する視点移行モデルを明らかにする。	2001	カナダ	292	・一次論文292件のメタデータ分析、メタ方法論、メタ理論の3つの分析過程を経て、それらの分析結果を統合する。	【6. 一次論文の成果、用いた方法、前提となる理論を分析した後、分析結果を統合する方法】 (2件, 5.0%)
40	慢性疾患に関する多様な一次論文を分析し、慢性疾患を持つクライアントの経験を明らかにする。	2002	カナダ	292	・一次論文292件のメタデータ分析、メタ方法論、メタ理論の3つの分析過程を経て、それらの分析結果を統合する。	

6種類の分析方法とは、【1. 現象を表す包括的な概念をうみ出す方法】【2. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法】【3. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連にも命名する方法】【4. 一次論文の成果間の関連に命名する方法】【5. 一次論文から抽出した記述を一定の基準に基づき分類した後、その分類の中で包括的な概念をうみ出す方法】【6. 一次論文の成果、用いた方法、前提となる理論を分析した後、分析結果を統合する方法】である。

以下、分析方法ごとに結果を論述する。

(1) 【1. 現象を表す包括的な概念をうみ出す方法】(20件, 50.0%)

これは、一次論文の成果あるいは記述を統合して、そこに存在する本質的要素を見出し、その現象を表す包括的な概念をうみ出す方法である。

例えば、ある対象文献は、「双子と母親の相互行為に関する研究」「三つ子の誕生に対する母親の反応に関する研究」などの一次論文の成果を統合して、そこに存在する「多胎児の母親になる経験」を見出し、この経験を表す包括的な概念をうみ出していた。

この方法は、対象文献40件のうち20件(50.0%)に用いられていた。また、20件のうち14件は、「一次論文の成果を比較し、現象を表す包括的な概念をうみ出す方法」を用いていた。残る6件は「一次論文から記述を抽出し、現象を表す包括的な概念をうみ出す方法」を用いていた。

この方法を用いた研究者の所属機関所在国は、米国15件、フィンランド2件、日本1件、カナダ1件、イギリス1件であった。

(2) 【2. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法】
(12件, 30.0%)

これは、一次論文の成果あるいは記述を統合し、そこに存在する本質的要素を見出し、その現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法である。

例えば、ある対象文献は、「誕生後2ヶ月の乳児と関係を形成する父親の経験に関する研究」「配偶者が母乳育児を行っている父親の経験に関する研究」などの一次論文の成果を統合して、そこに存在する「子どもの父親になる経験」を見出し、この経験を表す包括的な概念をうみ出していた。また、うみ出した概念がどのような順に出現するかを時間の流れに沿って並べ、モデルとして表現した。

この方法は、対象文献40件のうち12件(30.0%)に用いられていた。また、12件のうち4件は、「一次論文の成果・記述を統合し、現象を表す包括的な概念をうみ出し、概念を時間の流れに沿って並べる方法」を用いていた。残る8件は「一次論文の成果・記述を統合し、現象を表す包括的な概念をうみ出し、概念間の関連を図示する方法」を用いていた。

この方法を用いた研究者の所属機関所在国は、米国7件、フィンランド3件、日本2件であった。

(3) 【3. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連にも命名する方法】(1件, 2.5%)

これは、一次論文の記述を比較・統合し、そこに存在する本質的要素を見出し、その現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を明らかにし、その関連に命名する方法である。

対象文献は、「地域生活集団を対象としたケース管理の方法に関する研究」「地域ケアの現状から見た保健師の役割に関する研究」などの一次論文の記述を比較・統合して、そこに存在する「行政保健師の看護実践知」を見出し、包括的な概念をうみ出していた。また、うみ出した概念と概念の関連を明らかにし、それにも命名した。

この方法は、対象文献40件のうち1件(2.5%)に用いられていた。

この方法を用いた研究者の所属機関所在国は、日本であった。

(4) 【4. 一次論文の成果間の関連に命名する方法】(1件, 2.5%)

これは、一次論文の成果と他の成果を比較・解釈して成果間の関連を明らかにし、その関連に命名する方法である。

対象文献は、「看護学実習中の学生の行動を概念化した研究」と「看護学実習中の学生の経験を概念化した研究」を一次論文とし、一次論文の成果と成果の関連を明らかにし、そこに存在する「看護学実習中の学生の行動と経験の関連」を見だし、その関連に命名した。

この方法は、対象文献40件のうち1件(2.5%)に用いられていた。

この方法を用いた研究者の所属機関所在国は、日本であった。

(5) 【5. 一次論文から抽出した記述を一定の基準に基づき分類した後、その分類の中で包括的な概念をうみ出す方法】(4件, 10.0%)

これは、一次論文から抽出した記述を一定の基準に基づいて分類した後、その分類の中に存在する本質的要素を見出し、包括的な概念をうみ出す方法である。

例えば、ある対象文献は、「医師と協働する専門看護師の生きられた経験に関する研究」「高度な看護実践に関する研究」などの一次論文からスペシャリストの役割発展などに関する記述を抽出し、それを「促進要因」「阻害要因」に分類したのち、「促進要因」「阻害要因」それぞれに存在する本質的要素を表す概念をうみ出した。

この方法は、対象文献40件のうち4件(10.0%)に用いられていた。

この方法を用いた研究者の所属機関所在国は、米国3件、イギリス1件であった。

(6) 【6. 一次論文の成果、用いた方法、前提となる理論を分析した後、分析結果を統合する方法】(2件, 5.0%)

これは、一次論文の成果、用いた方法、前提となった理論を分けて分析した後、分析結果を統合する方法である。

例えば、ある対象文献は、慢性疾患に関する多様な一次論文を「成果」「用いた方法」「前提となる理論」に分けて分析した後、分析結果を統合して「慢性疾患の対する視点の移行」を表すモデルを構築した。

この方法は、対象文献40件のうち2件(5.0%)に用いられていた。

この方法を用いた研究者の所属機関所在国は、カナダ2件であった。

VI. 考 察

1. 対象文献の特徴

年次別に分析した結果は、対象文献40件のうち実に39件(97.5%)が、2000年以降に発表されていた事を明らかにした。また、わが国の「メタ統合」を用いた研究すべてが、2004年以降に発表さ

れている事も明らかにした。これは、「メタ統合」が国内外において非常に新しい方法であることを示す。

2. 対象文献が用いた分析方法

結果は、「メタ統合」を用いた研究の6種類の分析方法が存在することを明らかにした。

6種類の分析方法とは、【1. 現象を表す包括的な概念をうみ出す方法】【2. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法】【3. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連にも命名する方法】【4. 一次論文の成果間の関連に命名する方法】【5. 一次論文から抽出した記述を一定の基準に基づき分類した後、その分類の中で包括的な概念をうみ出す方法】【6. 一次論文の成果、用いた方法、前提となる理論を分析した後、分析結果を統合する方法】である。

次に、これら6種類の特徴を考察する。

最初に着目した分析方法は、【1. 現象を表す包括的な概念をうみ出す方法】(以下、【1.】)である。これは、一次論文の成果あるいは記述を統合して、そこに存在する本質的要素を見出し、その現象を表す包括的な概念をうみ出す方法である。

【1.】を用いた対象文献20件の研究目的を概観した結果は、次のことを明らかにした。それは、対象文献21件のうち6件(文献番号1, 2, 3, 7, 8, 12)が、「経験」を表す概念の産出を研究目的としていたことである。また、20件のうち5件(文献番号5, 6, 14, 15, 19)は、研究目的に明示してはいないものの、結果として「経験」を表す概念を産出していた。これは、【1.】を用いた対象文献20件のうち半数以上の11件が、「経験」を表す概念の産出を目ざしていたことを示す。また【1.】が、主として、新たに見出した「経験」を表す概念をうみ出すために用いられている現状を示す。これらは、【1.】が、「経験」を表す概念をうみ出

す際に有効に機能するという特徴をもつことを示唆する。

「経験」とは、主体としての人間が関わった過去の事実を主体の側から見た内容¹⁵⁾であり、「経験」の意味は知覚により与えられる¹⁶⁾。また、人間の行動はその知覚に支配される¹⁷⁾。これは、看護の対象となる人間の行動を予測し、それに応じた看護を提供するためには、その「経験」に対する理解が必要であることを示す。

【1.】は、「経験」を表す概念をうみ出す際に有効に機能するという特徴を持つ。これは、【1.】のうみ出す概念が、効果的な看護の提供に向けて、対象の行動を予測することに役立つことを示唆する。

以上は、【1.】が、新たに見出した「経験」を表す概念をうみ出す際に有効に機能するという特徴を持つことを示唆する。また、【1.】のうみ出す概念が、効果的な看護の提供に向けて、対象の行動を予測することに役立つことを示唆する。

次に着目した分析方法は、【2. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法】(以下、【2.】)である。これは、一次論文の成果あるいは記述を統合し、そこに存在する本質的要素を見出し、その現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法である。

【2.】を用いた12件のうち4件は、【1.】とは異なり、概念をうみ出すことに加え、うみ出した概念が時間の流れに沿ってどのように変遷するのかを明らかにしていた。残る8件は、概念をうみ出すことに加え、うみ出した概念と概念がどのように関連するのかを明らかにしていた。

これは、【2.】が、【1.】とは異なり、概念をうみ出すことに留まらず、概念の変遷や概念間の関連など、現象の複雑な構造までを表現する際に有効に機能するという特徴を持つことを示す。

次に着目した分析方法は、【3. 現象を表す包括

的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連にも命名する方法】(以下、【3.】)【4. 一次論文の成果間の関連に命名する方法】(以下、【4.】)である。

【3.】は、一次論文の記述を比較・統合し、そこに存在する本質的要素を見出し、その現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を明らかにし、その関連にも命名する方法である。また、【4.】は、一次論文の成果と他の成果を比較・解釈して成果間の関連を明らかにし、その関連に命名する方法である。

これらは、先述の【2.】と次のような共通点と相違点を持つ。

共通点は、一次論文の成果間の関連、うみ出した概念間の関連など、関連を解明していることである。これは、【3.】【4.】が、【2.】と同様に、現象の複雑な構造までを表現する際に有効に機能するという特徴を持つことを示す。

相違点は、関連の解明に留まらず、その「関連への命名」までを行うことである。看護現象を理論という共有可能な言語により、系統的に記述し、説明できたならば、それは看護における共有財産になる¹⁸⁾。これは、【3.】【4.】による「関連への命名」が、現象の複雑な構造に対する看護職者の共通理解に役立つことを示す。また、【3.】【4.】が、現象の複雑な構造に対する看護職者の共通理解に向けて、関連へ命名する際に有効に機能するという特徴を持つことを示唆する。

【3.】【4.】を用いた対象文献は1件ずつ存在し、どちらもわが国の文献であった。これは、一次論文の成果間の関連、概念間の関連に命名するという研究が、日本の研究者によって初めて着手されたことを示す。

このような【3.】【4.】の発展に向けては、その特徴である「関連への命名」の具体的方法に関する論述が不可欠である。しかし、【3.】【4.】を用いた文献は各1件と極めて少なく、その論述は

圧倒的に不足している。今後、【3.】【4.】に取り組む研究者が、「関連への命名」の具体的方法を十分に検討し、詳細に論述していくことが課題である。

以上は、【3.】【4.】が、現象の複雑な構造に対する看護職者の共通理解に向けて、関連へ命名する際に有効に機能するという特徴を持つことを示唆する。また、【3.】【4.】が、日本の研究者によって初めて着手されたことを示す。さらに、

【3.】【4.】の発展に向けては、この方法に取り組む研究者が、「関連への命名」の具体的方法を十分に検討し、詳細に論述していくことが課題であることを示す。

次に着目した分析方法は、【5. 一次論文から抽出した記述を一定の基準に基づき分類した後、その分類の中で包括的な概念をうみ出す方法】(以下、【5.】)である。

【5.】は、一次論文から抽出した記述を既存の一定の基準に基づいて分類した後、その分類の中に存在する本質的要素を見出し、その現象を表す包括的な概念をうみ出す方法である。

【5.】を用いた4件のうち2件は、「スペシャリストの役割の発展・効果的な実践」という現象の促進要因・阻害要因を解明したり、「心筋梗塞の徴候・症状を知らず知らず受診が遅れる」という事態の原因を解明したりし、ある看護の現象を引き起こす「原因」を解明していた。また、他の1件は、「ケアリング」の結果生じる人間の反応を解明し、ある現象に引き続き生じる「結果」を解明していた。

これは、【5.】が、新たな概念を用いて特定の看護現象の「原因」あるいは「結果」を表そうとしていることを示す。一方、これまで考察してきた【1.】【2.】【3.】【4.】は、新たな概念を用いて看護の現象自体を表そうとしていた。新たな概念を用いて特定の看護現象の「原因」あるいは「結果」を表そうとしていることは、他の分析方

法とは異なる【5.】の特徴である。

【5.】のうみ出す概念は、特定の看護現象の「原因」あるいは「結果」を表す。これは、看護職者が、看護目標達成に向けて、好ましい看護現象を生じるために、どの原因を追加し、除外する必要があるのかを判断することに役立つ。

以上は、【5.】が、新たな概念を用いて特定の看護現象の「原因」あるいは「結果」を表そうとするという特徴を持つことを示す。また、【5.】のうみ出す概念が、看護目標達成に向けて、好ましい看護現象を生じるために、どの原因を追加し、除外する必要があるのかを判断することに役立つことを示す。

最後に着目した分析方法は、【6. 一次論文の成果、用いた方法、前提となる理論を分析した後、分析結果を統合する方法】（以下、【6.】）である。

これは、一次論文の成果のみを統合するに留まらず、その方法や理論も含めて統合する方法である。このことは、【6.】を用いる研究者が、次の立場をとることに起因する。すなわち、方法と理論はしばしば、データやデータから得られる成果に密接に関連しており¹⁹⁾、対象となる現象を理解するには、成果のみでなく方法・理論も含めた理解が不可欠であるとする立場である。これは、

【6.】が、一次論文の成果の統合に留まらず、その成果がどのような理論的な前提に基づき、どのような方法により導かれたのかまでも含め、深く理解するという目的達成に有効に機能するという特徴を持つことを示す。

「メタ統合」を用いた研究を行う際、一次論文を選定する方法には、少なくとも次の2種類が存在する。それは、研究者自身の行った先行文献を選定する方法、徹底的に検索しつくす方法²⁰⁾である。一次論文として研究者自身の行った先行文献を選定した場合、研究の理論的背景は同一であり、研究方法も同一である可能性が高い。しかし、徹底的に検索しつくす方法を採用した場合、検索で

きた一次論文の理論的背景、研究方法是当然異なってくる。このような時、【6.】はその特徴を発揮する。

【6.】を用いた研究者は、一次論文をその成果、方法、理論に分けて分析した後、どのように統合を行うのか、その統合方法を詳細に論述していない。それは「メタ統合」の持つ創造性を犠牲にしないためにも、厳密に成文化すべきではない²¹⁾としているためである。これは、【6.】を具体的にどのように進めるのかは、今後この方法に取り組もうとする研究者個々に委ねられている現状を示す。今後、【6.】の発展に向けて、研究者が各自の研究目的に応じて、その方法を熟考し、開発していくことが課題である。

以上は、【6.】が、一次論文の成果の統合に留まらず、その成果がどのような理論的な前提に基づき、どのような方法により導かれたのかまでも含めて深く理解するという目的達成に有効に機能するという特徴を持つことを示す。この特徴は、「メタ統合」の一次論文を、徹底的に検索しつくす方法を用いて選定した場合に発揮される。また、【6.】を具体的にどのように進めるのかは、今後この方法に取り組もうとする研究者個々に委ねられており、【6.】の発展に向けては、研究者が各自の研究目的に応じて、その方法を熟考し、開発していくことが課題であることを示す。

VII. 結 論

1. 「メタ統合」を用いた対象文献40件のうち実に39件（97.5%）が、2000年以降に発表されていた。また、わが国の「メタ統合」を用いた研究すべてが、2004年以降に発表されていることも明らかにした。これは、「メタ統合」が国内外において非常に新しい方法であることを示す。
2. 「メタ統合」を用いた研究には6種類の分析方法が存在した。6種類とは、【1. 現象を表す包括的な概念をうみ出す方法】【2. 現象を表す

包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法】【3. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連にも命名する方法】【4. 一次論文の成果間の関連に命名する方法】【5. 一次論文から抽出した記述を一定の基準に基づき分類した後、その分類の中で包括的な概念をうみ出す方法】【6. 一次論文の成果、用いた方法、前提となる理論を分析した後、分析結果を統合する方法】である。

3. 【1. 現象を表す包括的な概念をうみ出す方法】は、新たに見出した「経験」を表す概念をうみ出す際に有効に機能するという特徴を持つ。また、【1.】のうみ出す概念は、効果的な看護の提供に向けて、対象の行動を予測することに役立つ。
4. 【2. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連を表す方法】は、概念をうみ出すことに留まらず、概念の変遷や概念間の関連など、現象の複雑な構造までを表現する際に有効に機能するという特徴を持つ。
5. 【3. 現象を表す包括的な概念をうみ出すとともに、うみ出した概念間の関連にも命名する方法】【4. 一次論文の成果間の関連に命名する方法】は、現象の複雑な構造に対する看護職者の共通理解に向けて、関連へ命名する際に有効に機能するという特徴を持つ。また、【3.】【4.】は、日本の研究者によって初めて着手された。さらに、【3.】【4.】の発展に向けて、この方法に取り組む研究者が、「関連への命名」の具体的方法を十分に検討し、詳細に論述していくことが課題である。
6. 【5. 一次論文から抽出した記述を一定の基準に基づき分類した後、その分類の中で包括的な概念をうみ出す方法】は、新たな概念を用いて特定の看護現象の「原因」あるいは「結果」

を表そうとするという特徴を持つ。また、【5.】のうみ出す概念は、看護目標達成に向けて、好ましい看護現象を生じるために、どの原因を追加し、除外する必要があるのかを判断することに役立つ。

7. 【6. 一次論文の成果、用いた方法、前提となる理論を分析した後、分析結果を統合する方法】は、一次論文の成果の統合に留まらず、その成果がどのような理論的な前提に基づき、どのような方法により導かれたのかまでをも含めて深く理解するという目的達成に有効に機能するという特徴を持つ。この特徴は、「メタ統合」の一次論文を、徹底的に検索しつくす方法を用いて選定した場合に発揮される。また、【6.】を具体的にどのように進めるのかは、今後この方法に取り組もうとする研究者個々に委ねられており、【6.】の発展に向けては、研究者が各自の研究目的に応じて、その方法を熟考し、開発していくことが課題である。

【引用文献】

- 1) Becoliel, J.Q. (1997) : Advancing Nursing Science Qualitative Approaches, Western Journal of Nursing Research, 6, 1-8
- 2) Sandelowski, M., Docherty, S., Emden, C. (1997) : Qualitative Metasynthesis: Issues and Techniques, Research in Nursing & Health, 20 (4), 365-371
- 3) 岡 美智代, 岡山久代, 香取洋子(2005) : 看護研究におけるメタ分析とメタ統合, 看護研究, 38 (3), 15-23
- 4) 前傾書2), 365-371
- 5) Schreiber, R., et al. (1997) : Qualitative Meta-Analysis, In Morse, J.M. (Ed.), Completing a Qualitative project, Sage Publication, 311-314, 1997
- 6) Noblit, G.W., et al. (1988) : Meta-Ethno-

- graphy: Synthesizing Qualitative Studies, Sage Publication, 26-29
- 7) Polit, D.F., et al. (2004): Nursing Research: Principles and Methods, 7th ed, Lippincott Williams & Willkins, 723
- 8) Beck, C.T. (2002): Mothering Multiples. A Meta-Synthesis of Qualitative Research, The American Journal of Maternal/Child Nursing, July/August, 27 (4), 214
- 9) 山下暢子, 舟島なをみ他(2004): メタ統合を用いた看護学研究の概観 記述理論統合による新たな知識体系の構築に向けて, 看護研究, 37 (3), 229-236
- 10) 前傾書 2), 365-371
- 11) 前傾書 5), 311-314
- 12) 前傾書 6), 26-29
- 13) 前傾書 7), 723
- 14) 前傾書 8), 214
- 15) 作田啓一(2004): 「経験」の項, 社会学事典, 見田宗介(編), 社会学事典, 245, 弘文堂, 東京
- 16) King, I.M. (1981): A Theory for Nursing —Systems, Concepts, Process—, Delmer Publishers, Inc., 24
- 17) Combs, A.W., Snygg, D. (友田不二男編, 手塚郁恵訳) (1970): 人間の行動—行動への知覚的なアプローチ, 上巻, 57-374, 岩崎学術出版, 東京
- 18) 舟島なをみ(2007): 質的研究への挑戦, 2, 3, 医学書院, 東京
- 19) Paterson, B.L., Thorne, S., Canam, C. & Jilling, C. (2001): Meta-Study of Qualitative Health Research: A Practical Guide to Meta-Analysis and Meta-Synthesis, Thousand Oaks, CA, Sage Publications
- 20) 前傾書 9), 229-236
- 21) 前傾書19), 5

The Current State of Nursing Research Involving Meta-Synthesis : Focusing on Analysis Methods

Nobuko Yamashita, Hiroe Miura, Yasuhiro Matsuda
Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objective : The aims of the present study were to clarify the current state of nursing research involving meta-synthesis by outlining the analysis methods and consider the features and future issues of each method.

Methods : Foreign and Japanese literature were respectively reviewed via *CINAHL* using the keywords 'metasynthesis' and 'meta-synthesis', and *Igakuchozasshi* (Japan Centra Revuo Medicina), using the keyword "*meta-togo*" (meta-synthesis). Literature involving 'meta-synthesis' were selected, the analysis methods were outlined and the current state was clarified.

Results : Forty literatures involving "meta-synthesis" were selected and 6 kinds of analysis method were identified. These included, "1. Method generating comprehensive concepts explaining the phenomena being researched." and "2. Method generating comprehensive concepts explaining the phenomena being researched and describing the relationship between these concepts".

Conclusion : The features of 6 kinds of analysis method were clarified. These findings enable the selection of analysis methods that fit the respective research objectives. In order to further develop each analysis method, researchers must sufficiently consider specific methods and describe them.

Key words : Meta-synthesis, qualitative research, systematic literature review